

昼寝するお化け

二〇一三年十一月四日の産経新聞に、一人の修道女の訃報が載せられた。

根岸美智子さん。「御聖体の宣教クララ修道会」の修道女であった。若々しく見える方だったが、七十六歳だった。

もう何十日も前、私はシスター・根岸の療養先に電話をした。病氣は末期で、電話口にも出られないかもしれない、と聞いてはいたが、長い間待ったあげく、私は向こう側に細い切れ切れの声を聞いた。しかしそれは、もはや文意として繋がってお



●Illustration / 井筒啓之

それには私、シスター・根岸と、もう現世で十分濃厚に会うという幸せを持ったのであった。何十年も友人や親戚として暮らしても別に深くかわらなかつた人もいることを思えば、私はシスターの生涯のすべてをかけた

らず、私はシスターとの会話は不可能だと悟った。私は「そのうちにお会いしにいけますからね」と言ったが、これは私のシスター・根岸に示した最後の不誠実だった。私はその時、実はシスターを見舞うことを、瞬間的に諦めていたのだった。

シスターはおそらく痛み止めの薬で、救われておられる状態に違いはない、と私は察した。とすれば、その時間のない状態を乱さない方がいいのであった。激烈な痛みからだけは解放されて、夢うつでおられるなら、それが一番いい。

「或る修道女の生涯の1ページ」 曾野綾子

事業の、ほんの一部ではあろうと、深く繋がることを許された。私はそれで十分光栄であった。

シスター・根岸と私の接点は、西アフリカのシエラレオネという国が舞台だった。シスターはそこで長い年月、土地の気の毒な子供や被災民のために働いておられたのである。

シエラレオネは遠いアジアに住む私たちにとっては、なかなか行きにくい土地であった。或る年、私はシエラレオネに行こうとして、内乱のため、二カ月ほど前になって、急遽計画を諦めたことがある。シエラレオネと日本を結ぶ一切の電話回線が通じなくなったからである。

シエラレオネは人口約六百万人の国である。一人あたりのGNIは約四百六十ドル。四万六千円で一年暮らす生活を日本人は想像できないだろう。平均寿命は男女ともに五十

歳にも達していない。乳児の死亡率が千人に百十四人。夫婦が子供を八人人生んでも、そのうちの一人は死ぬという確率である。

一九九〇年代の約十年間に続いた内乱について、私は詳しく書くことはできないが、その間に政府軍と反政府勢力と呼ばれる人々が、あらゆる残虐と破壊を繰り返した。子供たちの両手首や両足を切断し、少年には武器を持たせて戦闘に駆りだし、少女は拉致してレープをし、その後も売春婦として使った。

手足を切断する「アンピユテーション」という英語を私が覚えたのも、シエラレオネである。「曾野さん、手を切られるのと、足を切られるのと、どっちがましだと思いますか？」とシスターは私に尋ねた。「足でしょう」

と私が答えられたのは、自分が足を骨折した経験があるからであった。もちろん私の足の怪我は片方だけで、医療設備の整った日本で手術も受けられたのだが、その当時、私は両手が使えないことで、どうにか自分一人で日常生活を続けることができた。「そうなんです。足がなくても義足でも歩けます。しかし両手を切られてしまったら、一生自分の大使

の始末ができません」

とシスターは言われた。シスター自身、この国に入国できなかった時代もあるというが、シスターはその間に糖尿病と闘いながら決してシエラレオネを捨てようとはしなかった。

二〇〇〇年の停戦合意以来、状況は少し変わり、日本から復興のためのお金も届けられるようになった二〇〇二年に、私たちのグループはシエラレオネに入ったのである。

その時の私の秘密の役目は、現金の輸送であった。どこの国も内乱で車両を失っている。もともとトラックもバスも四駆も少ない土地が、輸送手段を失えば、復興の工程は始まらないのである。

私が働いていたNGOは、シスターの修道院に四駆を買うためのお金を日本から送金しようとしていたのである。

しかし驚いたことに、スイス銀行はその送金を引き受けなかった。シエラレオネには莫大な債務があるので、先方国のどの組織に送ろうとシエラレオネに行くすべてのお金は、スイス銀行がおさえてしまう可能性がある、と親切な人が教えてくれたのである。

数カ月後仕方なく、私は自分のハンドバッグに約三百五十万円のユーロの札束を潜ませて、パリ経由、シエラレオネの首都フリータウンに向かうグループに加わった。

到着した時は天にも登る嬉しきであった。これでやっと現金輸送の重圧から解放される。

シスター・根岸とメキシコ人の修道院長とは、何気なく院長室に入ってから鍵を閉め、窓のカーテンも下ろした。その密室の中で私は現金を渡し、受け取りをもらった。実は仲間の修道女たちを用心したので

520

好評連載 ESSAY

ある。彼女たちがお金を盗むと考えたのではない。人のいいシスターたちは、セコハンにせよちゃんと動く四駆を買える資金が届いた嬉しきあまり、その日会うすべての人に、「日本人が、車を買うお金を持ってきてくれたのよ」と無邪気に喋る恐れがある。するとシスターの身持ちの悪い弟や甥が、仲間とかたたらってその金を奪うのを目的に、その夜、修道院を襲う可能性もまた十分に考えられたから、私たちは用心したのである。

その当時、シスターの修道院は、内乱時の戦闘で二階の屋根を吹き飛ばされ、かろうじて二階の床が一階の天井になっていた。私たちはそれでも屋根のある建物に寝られることを感謝した。

内乱の中で、体だけでなく、心にも体にも傷を負った子供たちはいくらかでもいた。国家がPTSD(心的

外傷後ストレス障害)を癒したり、対立して殺し合った部族間の憎悪を解消するような方策を立てる余裕はなかった。私たちはいたるところで、カトリック教会の手に任されていた。ここでもイタリアの宣教会が大きな働きを示していた。

私知っていたのは、シスター・根岸の豊かな生涯のほんの1ページだ。しかしほとんどの人ができなかった大きな仕事であった。

最後の電話以来、私はシスターが一刻も早く残虐だったこの世から、「完全な優しさのうちにある主」の元に帰られることを、実は祈り続けていたことを忘れない。



老人になる方法

明るい老人に



曾野綾子

不幸は

人生の財産



慧眼と達観の四十七篇

人間は死ぬ日まで、使える部分を使って、自分を自分で生かすのが当然だ。耳が遠くなっても料理はでき、視力がなくても洗濯はできる。老人教育でもっとも必要なことは、常に楽しい老人になれ、ということだ。

好評発売中

定価 一五七五円(税込) 四六判 一五六頁
ISBN 978-4-10-618000-9

小学館 小学館読者サービスセンター TEL: 03-6281-3555
http://www.shogakukan.co.jp

●このエッセイは隔週で連載しています